

博士論文（要約）

論文題目 朝鮮時代人物画の展開—契会図、雅集図と画家の自己表象—

氏 名 中尾 道子

目次

序論	1
第一部 朝鮮時代人物画研究序説	13
序章 記録と記憶のメディアとしての絵画	15
第一章 契会図にみる主題の変遷―山水から人物へ	19
はじめに	
第一節 契会図の変遷	
第二節 老徳を寿ぐ宴―朝鮮一六世紀末（一五八〇年代）の作例	
第三節 東京藝術大学附属図書館蔵「中枢府重修宴契会図」について	
第四節 一六世紀末遊宴図像の淵源について	
おわりに	
第二部 集いのかたちの変容―ジャンルの横断と雅俗の交錯	63
第二章 一八世紀朝鮮の知識人たちの表象―姜世晃周辺の画家たち	65
はじめに	
第一節 文人画家たちによる集いのかたち	
第二節 画員画家たちによる集いのかたち	
おわりに	
第三章 金弘道「檀園図」考	81
はじめに	
第一節 絵画としての「檀園図」	
第二節 金弘道の交遊関係とその絵画化	

おわりに

第三部 自画像への射程——一八世紀の朝鮮社会と画家の自己表象……………113

第四章 金弘道の自画像的表現とその特質……………113

はじめに

第一節 画署の画員と朝鮮時代の自画像

第二節 金弘道「布衣風流図」(三星美術館Leeum蔵)と「月下吹笙図」(澗松美術館蔵)

第三節 「秋声賦図」(三星美術館Leeum蔵)

おわりに

第五章 李麟祥「劍僊図」をめぐる……………125

はじめに

第一節 李麟祥について

第二節 作品の概要と先行研究

第三節 作品分析——主題とモチーフを中心に——

第四節 「劍僊図」の絵画的特質——自己と自己周辺の表象のための一手法

おわりに

補論 「儒画」及び「士気画」について……………175

結論……………189

参考文献一覧……………195

図版……………225

本文

五年以内に出版予定である。

凶版については著作権者からの許諾が得られていないため、公表は不可である。

参考文献一覧

*本論文で参照ないし引用した文献を列記したものである。各文献は必ずしも初出掲載をとらず、実際に参照したものを掲出し、○内に初出あるいは再録情報を示した。

*史料篇・参考文献篇に分け、参考文献篇(含辞典・目録・図録類)では、韓国語文献・日本語文献・中国語文献・英語文献・図録の順に列記した。

一、史料篇

朝鮮史料

- 『朝鮮王朝実録』太白山本(『李朝実録』学習院東洋文化研究所、一九五三年)
- 『承政院日記』(国史編纂委員会、一九六一〜一九七七年)
- 『増補文献備考』(古典刊行会編、東国文化社、一九七一年)
- 『東文選』(学習院東洋文化研究所、一九七〇年)
- 『経国大典』(学習院東洋文化研究所、一九七一年)
- 『経国大典註解』(学習院東洋文化研究所、一九七一年)
- 『続大典』(学習院東洋文化研究所、一九七二年)
- 『政事冊』(保景文化社、一九九〇年)
- 『新增東国輿地勝覧』(書景文化社、一九九四年)
- 『松泉筆譚』(沈鏗著、韓国学中央研究院蔵書閣蔵)
- 『豹庵遺稿』(姜世晃著、韓国精神文化研究院影印本、一九七九年)

- 『觀我齋稿』（趙采祐著、韓國精神文化研究院影印本、一九八四年）
- 『東國李相國集』（李奎報著、『影印標點韓國文集叢刊』一・二、民族文化推進會、一九九一年）
- 『保閑齋集』（申叔舟著、『影印標點韓國文集叢刊』一〇、民族文化推進會、一九八九年）
- 『四桂集』（徐居正著、『影印標點韓國文集叢刊』一〇・一一、民族文化推進會、一九八九・一九九一年）
- 『私淑齋集』（姜希孟著、『影印標點韓國文集叢刊』一二、民族文化推進會、一九八九年）
- 『梅月堂集』（金時習著、『影印標點韓國文集叢刊』一三、民族文化推進會、一九八九年）
- 『穌齋集』（盧守慎著、『影印標點韓國文集叢刊』三五、民族文化推進會、一九九〇年）
- 『林塘遺稿』（鄭惟吉著、『影印標點韓國文集叢刊』三五、民族文化推進會、一九九〇年）
- 『一松集』（沈喜壽著、『影印標點韓國文集叢刊』五七、民族文化推進會、一九九一年）
- 『宋子大全』（宋時烈撰、『影印標點韓國文集叢刊』一〇八・一一六、民族文化推進會、一九九三年）
- 『知守齋集』（兪拓基著、『影印標點韓國文集叢刊』二一三、民族文化推進會、一九九八年）
- 『凌壺集』（李麟祥著、『影印標點韓國文集叢刊』二二五、民族文化推進會、一九九九年）
- 『旅庵遺稿』（申景濬著、『影印標點韓國文集叢刊』二三一、民族文化推進會、二〇〇一年）
- 『樊巖集』（蔡濟恭著、『影印標點韓國文集叢刊』二三五・二三六、民族文化推進會、一九九九年）
- 『海佐集』（丁範祖著、『影印標點韓國文集叢刊』二三九・二四〇、民族文化推進會、一九九九年）
- 『青城集』（成大中著、『影印標點韓國文集叢刊』二四八、民族文化推進會、二〇〇〇年）
- 『青莊館全書』（李德懋著、『影印標點韓國文集叢刊』二五七・二五九、民族文化推進會、二〇〇〇年）
- 『金陵集』（南公轍著、『影印標點韓國文集叢刊』二七二、民族文化推進會、二〇〇一年）
- 『研經齋全集』（成海応著、『影印標點韓國文集叢刊』二七三・二七八、民族文化推進會、二〇〇一年）
- 『丹陵遺稿』（李胤永著著、『韓國文集叢刊』続八二、韓國古典翻訳院、二〇〇九年）
- 『太乙庵集』（申國賓著、『韓國文集叢刊』続八八、韓國古典翻訳院、二〇〇九年）

- 『眉叟先生文集』(許穆著、韓國文集編纂委員會編『韓國歷代文集叢書』四八四、四八九、景仁文化社、一九九一年)
『重湖先生文集』(尹卓然著、韓國文集編纂委員會編『韓國歷代文集叢書』一一七九、景仁文化社、一九九七年)
『太湖先生文集』(洪元燮著、韓國文集編纂委員會編『韓國歷代文集叢書』二八五〇、景仁文化社、一九九九年)
『慵齋叢話』(成俔撰、朝鮮古書刊行會編『大東野乘』一、朝鮮古書刊行會、一九〇九年)
『林園十六志』(徐有榘纂、서울대학교 古典刊行會『서울대학교 古典叢書』四、九、一九六六、六八年)
『燕巖集』(朴趾源著、『韓國學基本叢書』一五、景仁文化社、一九七四年)
『安和堂私集』(馬聖麟著、林煥澤編『李朝後期間巷文學叢書』六、驪江出版社、一九九一年)
『震溟集』(權攄著、韓國漢文學會編『韓國漢文學資料叢書』上・中・下、民昌文化社、一九九四年)
『槿域書畫徵』(吳世昌著、啓明俱樂部、一九一七年) ↓ 『朝鮮書畫人名辭典』(國書刊行會、一九九二年)
『朝鮮史料集眞』下・統(朝鮮史編修會編、朝鮮總督府、一九三六、七年)
『朝鮮畫論集成』(高裕燮編、考古美術同人會、一九六五年)
『槿域印藪』(吳世昌編著、大韓民國國會圖書館、一九六八年)
『韓國美術資料集成』全九卷(秦弘燮編著、一志社、一九八七、二〇〇三年)
『石農畫苑』(金光國著・兪弘濬／金萊植訳『金光國 石農畫苑(김광국의 석농화원)』놀와、二〇一五年)

中国史料

- 『考槃余事』(屠隆著・中田勇次郎訳『考槃余事：文人趣味』弘文堂書房、一九四三年)
『歷代名画記』(張彦遠撰・長広敏雄訳注『歷代名画記』一・二、平凡社、一九七七年)
『夢溪筆談』(沈括著、梅原郁訳注『夢溪筆談』一・二・三、平凡社、一九七八、一九七九、一九八一年)
『宋史』(脱脱ほか撰、一九七七年、中華書局)
『太平清話』(陳繼儒記、王文濡編輯『說庫』一九一五年、中華書局)

『画禅室随筆』(董其昌著、福本雅一ほか訳『画禅室随筆:中国絵画の世界:新訳』一九八四年、日貿出版社)
『容台集』(董其昌撰、国立中央図書館編輯『明代藝術家集彙刊』一一〜一四、一九六八年、台北国立中央図書館)

日本史料

『増訂古画備考』(朝岡興禎著/太田謹補、思文閣、一九七〇年)

データベース

『全唐詩庫』(鄭州大学網絡管理中心) (<http://www3.zzu.edu.cn/qts/>)

二・研究文献篇(含辞典・目錄・図録類)

〈韓国語文献〉(가나다順)

姜寬植

一九八九・一九九〇 「觀我齋 趙榮祐 畫學考(上)・(下)」『美術資料』四四・四五

一九九〇 「朝鮮後期 南宗畫의 흐름」『潤松文華』三九

一九九二 「朝鮮後期 美術의 思想的 基盤」哲學宗敎研究室編輯『韓國思想史大系』五(近世後期篇) 韓國精神文化研究院

一九九八 「진경시대 초상화 양식의 이념적 기반」崔完秀ほか『진경시대2: 예술과 예술가들』돌베개

二〇〇一 『조선 후기 궁중화원 연구』上・下、돌베개

「조선시대 초상화의 圖像과 心像」 조선 중후기 선비 초상화의 修己的 의미를 통해서 본 再現的 圖像의 實存的 의미와 기능에 대한 성찰」『美術史學』一五

- 二〇一一 「조선시대 도화서 화원 제도」 『朝鮮畫員大展』三星美術館 L E E U M
姜明官
- 一九九七 『조선 후기 여항문학 연구』 창작과비평사
- 一九九八 「朝鮮後期 京華世族과 古董書畫 趣味」 『東洋漢文學研究』 一一一
高蓮姬
- 二〇一五 『화상찬으로 읽는 사대부의 초상화』 韓國學中央研究院出版部
權寧弼
- 一九九六 「朝鮮時代선비그림의 理想」 高麗大學校博物館編 『朝鮮時代선비의 墨香』 高麗大學校博物館韓國學研究所
- 一九九七 「조선왕자 畫員에 있어서 전통과 創意的 개념」 『한국학연구』 九(『미적 상상력과 미술사학』 文藝出版社、二〇〇〇년에再録)
- 一九九八 「화원의 미학 · 中人層의 사회적 소외를 중심으로」 『한국학연구』 一〇(『미적 상상력과 미술사학』 文藝出版社、二〇〇〇년에再録)
- 金景淑
- 一九九五 「18세기 朝鮮通信使 製術官 및 書記의 文學世界—서얼의 신분과 文學관을 통해」 『濫知論叢』 一
- 二〇〇五 『조선 후기 서얼문학 연구』 소명출판
- 金起弘
- 一九九二 「18세기 朝鮮文人畫의 新傾向」 『濶松文華』 四三
- 一九九八 「현재 심사정과 조선 남종화풍」 崔完秀ほか 『진경시대 2: 예술과 예술가들』 돌베개
- 金道榮
- 二〇一四 「朝鮮時代 〈呂洞賓圖〉 연구(1)」 『中國小說論叢』 四三
- 金明仙

- 一九九六 「『芥子園畫傳』初集과 朝鮮 後期 南宗山水畫」 『美術史學研究』二一〇
- 金明昊
- 一九八三 「神仙傳에 대하여」 새터 姜漢永教授古稀紀念論文集刊行委員會編 『韓國관소리·古典文學研究』 새터 姜漢永教授古稀紀念』亞細亞文化社
- 金수진
- 二〇〇四 「凌壺觀 李麟祥의 文學과 繪畫에 대한 일고찰—시대인식과의 관련을 중심으로—」 『古典文學研究』二六
- 二〇一一 「家藏本 雷象觀集』小考」 『韓國文化』五五
- 二〇一三 「凌壺集』편집시각 고찰」 『국문학연구』二七
- 二〇一五 「충남대 소장 雷象觀集』에 대한 서지적 고찰」 『書誌學研究』六四
- 金榮男
- 二〇〇七 「기무라켄카도(木村蒹葭堂, 1736-1802)의 繪畫 研究」 『美術史學』二一
- 金塔俊
- 一九四九 『朝鮮美術大要』乙酉文化社
- 金元龍
- 一九六一 「李朝의 畫員」 『郷土서울』一一
- 金貞淑
- 二〇〇四 『興宣大院君 李昞應의 藝術世界』一志社
- 金芝英
- 一九九四 「18세기 畫員의 활동과 畫員畫의 변화」 『韓國史論』三二一
- 金萊植／兪弘濬訳
- 二〇一五 『金光國 石農畫苑(김광국의 석농화원)』 놀와

- 金炫志
- 二〇一四 「김홍도의 문인 표상의 화가 이미지 연구: 강세황의 화평과 단원기」 분석을 중심으로」 朴銀順／朴海勳ほか『조선시대 회화의 교류와 소통: 조선시대 회화 연구의 새로운 접근』 社會評論아카데미
- 文明大
- 一九八五 「한국의 道釋人物畫」 孟仁在責任監修 『韓國의 美20』 人物畫』 中央日報社 文化財庁編
- 二〇〇七 『한국의 초상화: 역사 속의 인물과 조우하다』 文化財庁
- 孟仁在
- 一九七三 「金弘道筆檀園圖」 『考古美術』 一一八
- 一九七六 「風俗畫考」 『潤松文華』 一〇
- 一九八五 「우리나라 人物畫의 展開」 孟仁在責任監修 『韓國의 美20』 人物畫』 中央日報社
- 文德熙
- 一九九六 「南公轍(1760~1840)의 書畫觀」 『東方學』 一 (韓瑞大學校東洋古典研究所)
- 一九九七 「南公轍(1760~1840)의 『金陵集』에 보이는 中國書畫에 대한 認識」 『美術史學研究』 二二三
- 閔賢九
- 一九八三 『朝鮮初期의 軍事制度和 政治』 韓國研究院
- 朴시현
- 二〇一三 『이인문의 〈누각아집도〉 연구』 서울大學校大學院碩士學位論文
- 朴銀順
- 一九九六 「16世紀 讀書堂契會圖 研究: 風水의 實景山水畫에 대하여」 『美術史學研究』 二二二
- 一九九九 「朝鮮初期 江邊契會와 實景山水畫: 典型化的인 한 양상」 『美術史學研究』 二二二・二二三

- 二〇〇二 「조선 초기 한성의 회화: 新都形勝·昇平風流」 『講座美術史』 一九
- 二〇〇六 「畫員과 宮中繪畫: 조선 초기 궁중회화의 양상과 기능 (2)」 『講座美術史』 二六 (二)
- 二〇〇七 「다양한 만남과 만남을 기록한 그림」 國史編纂委員會編『한국문화사 19』 그림에게 묻은 사대부의 생활과 풍류』 國史編纂委員會
- 二〇一五 「恭齋 尹斗緒의 畫學과 儒畫」 『溫知論叢』 四二
- 朴晶愛
- 二〇一二 「研經齋 成海應의 書畫趣味와 書畫觀 연구」 『書畫雜識』를 중심으로 『震檀學報』 一一五
- 二〇一三 「『書畫雜識』를 통해 본 成海應의 繪畫鑑評(양상과 의의)」 『溫知論叢』 三三
- 朴廷蕙
- 一九九五 「儀軌를 통해 본 朝鮮時代의 畫員」 『미술사연구』 九
- 二〇〇〇 『朝鮮時代 宮中記錄畫 研究』 一志社
- 二〇一一 『왕과 국가의 회화』 돌베개
- 朴孝銀
- 一九九九 「홍성하 소장본 金光國의 『石農畫苑』에 관한 고찰」 『溫知論叢』 五
- 二〇〇二 「18세기 朝鮮 文人들의 繪畫蒐集活動과 畫壇」 『美術史學研究』 二二三・二三四
- 二〇〇三 「김광국의 석농화원과 18세기 후반의 조선화단」 兪弘濬·李泰浩編『遊戲三昧—선비의 예술과 선비취미』 學古齋
- 朴熙秉
- 一九九二 『韓國古典人物傳研究』 한길사
- 二〇一三 「고전문학과 예술의 사회사: 李麟祥〈劔僊圖〉의 재해석」 『국문학연구』 二六
- 白仁山
- 二〇〇九 「朝鮮王朝 道釋人物畫」 『潤松文華』 七七

- 辺英燮
 二〇一二 「스승과 제자, 姜世晃 이 쓴 金弘道 전기」 檀園記·檀園記 又一本」 『美術史學研究』 二七五・二七六
 二〇一六 『豹菴 姜世晃 繪畫 研究』 사회평론아카데미 (一志社, 一九八八年의 改訂版)
 徐守鏞
 二〇一一 「重湖 尹卓然 研究」 『東洋禮學』 二四
 成範重
 一九八一 「松石園詩社와 그 文學」 『國文學研究』 五三
 孫惠莉
 二〇〇八 「18~19세기 초반 문인들의 서화감상과 비평에 관한 연구」 成海應의 『書畫雜誌』와 南公轍의 『書畫跋尾』를 중심으로 『漢文學報』 一九
 宋憲暎
 二〇〇一 「鄭敦과 金弘道의 故事人物畫 비교 연구」 『美術史學報』 一六
 二〇〇四 『朝鮮 後期 雅會圖 研究』 梨花女子大學校大學院博士學位論文
 二〇〇五 「조선 후기 雅會圖」 室內雅會圖를 중심으로 『美術史學研究』 二四六・二四七
 二〇〇八 『조선 후기 雅會圖』 다할미디어
 辛泳周
 二〇一一 「金陵 南公轍의 書畫에 대한 관심과 書畫跋尾」 『東方漢文學』 四七
 安大會
 二〇〇七 「그림을 아는 선비, 제발을 남기다」 의원 김광국, 고종학자 성해응」 『선비답게 산다는 것』 푸른역사
 二〇〇七 「여행가, 정란」 천하 모든 땅을 내 발로 밟으리라」 『조선의 프로페셔널』 자신이 믿는 한 가지 일에 조건 없이 도전한 사람들』 휴머니스트

安輝濬

一九七五 「蓮榜同年一時曹司契會圖」小考 『歷史學報』 六五

「一六世紀中葉의 契會圖를 통해 본 朝鮮王朝時代 繪畫樣式의 變遷」 『美術資料』 一八 (『韓國繪畫史研究』 時空社、二〇〇〇年に再録)

一九八〇 『韓國繪畫史』 一志社 (藤本幸夫 / 吉田宏志訳、一九八七年、吉川弘文館)

一九八二 「高麗 및 朝鮮王朝의 文人契會와 契會圖」 『古文化』 二〇 (『韓國繪畫의 傳統』 文藝出版社、一九八八年に再録)

「한국의 文人契會와 契會圖」 韓相福編 『한국인과 한국문화』 尋雪堂 (『한국 그림의 전통』 社會評論、二〇一二年に再録)

一九八八 「한국 풍속화의 발달」 『韓國繪畫의 傳統』 文藝出版社

「朝鮮王朝時代의 畫員」 『韓國文化』 九 (『한국회화사연구』 時空社、二〇〇〇年に訂正再録)

一九八九 「奎章閣所藏 繪畫의 內容와 性格」 『韓國文化』 一〇

一九九七 『옛 궁궐 그림』 대원사

一九九九 「한국의 초상화」 三星文化財團編 『새천년 특별기획』 인물로 보는 한국미술』 三星文化財團

二〇〇〇 『한국회화의 이해』 時空社

二〇〇九 『안견과 몽유도원도』 社會評論 (安輝濬 · 李炳漢 『안견과 몽유도원도』 藝耕出版社、一九八七年の改訂版)

安輝濬 / 閔吉泓編

二〇〇九 『역사와 사상이 담긴』 조선시대 인물화』 學古齋

양영욱

二〇〇八 「『松泉筆譚』의 기록 양상에 대한 一考察」 『漢文學論集』 二六

오상욱

二〇一五 「尙古堂 金光遂의 古董書畫 趣味와 繼承에 대하여」 『民族文化』 四六

吳柱錫

一九九八 「단원 김홍도의 생애와 예술」 崔完秀ほか 『진경시대 2… 예술과 예술가들』 돌베개

『檀園 金弘道—조선적인, 너무나 조선적인 화가—』 悅話堂

二〇〇六 『이인문의 강산무진도』 新丘文化社

『단원 김홍도』 술 (悅話堂, 一九九八年의改訂版)

유미나

二〇〇五 「朝鮮 中期 吳派畫風の 진래… 千古最盛<帖을 중심으로」 『美術史學研究』 二四五

유보은

二〇〇九 「조선 후기 西園雅集圖와 그 다층적 의미… 金弘道 작품을 중심으로」 『美術史學研究』 二六三

劉奉學

一九八九 「朝鮮後期 風俗畫 變遷의 思想的檢討」 『澗松文華』 三六 (「조선후기 풍속화 변천의 사회·사상적 배경」 崔完秀ほか 『진경시대 2… 예술과 예술가들』 돌베개, 一九九八年に再録)

柳承旻

二〇〇六 『凌壺觀 李麟祥(1710-1760) 書藝와 繪畫의 書畫史的 位相』 高麗大學校大學院碩士學位論文

二〇〇七 「凌壺觀 李麟祥(1710-1760)의 山水畫研究」 『美術史學研究』 二五五

柳玉暻

一九九九 「신수유물소개」 國立中央博物館編 『박물관신문』 三三三九号

二〇〇〇 「1585년〈宣祖朝耆英會圖〉考察—東垣先生寄贈〈耆英會圖〉를 中心으로—」 『東垣學術論文集』 三

二〇〇二 「朝鮮時代 記錄畫에 보이는 風俗的 요소」 國立中央博物館編 『朝鮮時代風俗畫』 國立中央博物館

二〇一三 「朝鮮時代 宴會圖의 體制修飾 이미지 研究」 『美術史論壇』 三七

俞弘濬

- 一九八四 「文人畫家 李麟祥의 作家像研究」 『精神文化研究』 一九
- 「李麟祥 繪畫의 形成과 變遷」 『考古美術』 一六一
- 一九八五 「朝鮮時代 記錄畫·實用畫의 類型과 內容」 『藝術論文集』 二四 (尹龍二·兪弘濬·李泰浩 『한국미술사의 새로운 지평을 찾아서』 學古齋, 一九九七年に再録)
- 一九八八 「조선 후기 문인들의 서화 비평」 『19세기 문인들의 서화』 悅話堂
- 一九九〇 「檀園金弘道研究 노트」 国立中央博物館編 『檀園金弘道』 国立中央博物館
- 「조선시대 화가들의 삶과 예술 공재 윤두서」 조선 후기 사실주의 회화의 선구」 『歷史批評』 一三
- 一九九一 「조선시대 화가들의 삶과 예술 능호관 이인상」 눈있는 사람만이 알아주는 화가」 『歷史批評』 一四
- 一九九二 「李奎象 (一夢稿) 의 畫論史的 的의」 『美術史學』 四
- 一九九三 「조선시대 화가들의 삶과 예술 단원 김홍도」 조선적인, 가장 조선적인 불세출의 화가」 『歷史批評』 二四
- 一九九八 『조선시대 화론 연구』 學古齋
- 二〇〇一 『畫人列傳 1』 내 비록 환쟁이라 불릴지라도』 歷史批評社
- 『畫人列傳 2』 고독의 나날 속에도 봄을 놓지 않고』 歷史批評社
- 二〇一五 金萊植訳 『金光國 石農畫苑 (김광국의 석농화원)』 놀와
- 尹軫映
- 二〇〇一 「松澗 李庭檜 (1542 ~ 1612) 所有의 同官契會圖」 『美術史學研究』 二二〇
- 「조선시대 연회도의 유형과 회화적 특성—官僚文人들의 연회도를 중심으로—」 徐仁華·尹軫映編 『朝鮮時代宴會圖』 民俗院
- 二〇〇三 『朝鮮時代契會圖研究』 韓國精神文化研究院韓國學大學院博士學位論文
- 二〇〇四 「안동 지역 문중소장 회회도의 내용과 성격」 『국학연구』 四
- 「조선시대 관료사회의 新參禮와 契會圖」 『역사민속학』 一八

- 二〇〇五 「16세기 契會圖에 나타난 山水樣式의 변모」 『美術史學』一九
尹喜淳
- 一九四六 「李朝의 圖畫署雜攷」 『朝鮮美術史研究』 서울신문사
- 李東洲
- 一九七五 『우리나라의 옛 그림』 博英社
- 李成美
- 一九九二 「樸園經濟志」에 나타난 徐有榘의 中國繪畫 및 畫論에 대한 關心… 朝鮮時代 後期 續畫史에 미친 中國의 影響」
『美術史學研究』一九三
- 一九九六 「朝鮮時代 후기의 南宗文人畫」 高麗大學校博物館編 『朝鮮時代 선비의 墨香』 高麗大學校博物館韓國學研究所
- 李成美／金廷禧
- 二〇一五 『韓國繪畫史用語集』 韓國精神文化研究院／다할미디어 (二〇〇三年의 增補改訂版)
- 李順未
- 一九九八 「澹拙 姜熙彦의 繪畫 研究」 『미술사연구』一一
- 李禮成
- 二〇〇〇 『玄齋 沈師正 研究』 一志社
- 二〇一四 『玄齋 沈師正 조선남종화의 탄생』 돌베개
- 李源福
- 一九八七 「辛亥生甲會之圖」 『美術資料』三九
- 李源福·趙容重
- 一九九八 「16世紀末 1580年代) 契會圖 新例—鄭士信 參與 蓬山契會圖」 등 6幅—」 『美術資料』六一
- 李은하

- 二〇〇五 「觀我齋 趙榮祐의 繪畫 연구」 『美術史學研究』 二四五
- 李周玟
- 二〇〇六 「화가의 자화상 · 18세기 揚州畫派의 작품을 중심으로」 『미술사연구』 二〇
- 板倉聖哲 (이타쿠라 마사아키)
- 二〇〇六 「趙孟頫에 의한 自己表象의 한 手法 (謝幼輿丘壑圖卷) 을 중심으로」 『美術史論壇』 二二一
- 李泰浩
- 一九八五 「金弘道の 眞景山水畫」 鄭良謨責任監修 『韓國의 美 21』 檀園金弘道』 中央日報社
- 一九九六 『조선 후기 회화의 사실정신』 學古齋
- 一九九八 「조선시대의 초상화」 『미술사연구』 一一一
- 二〇〇〇 「禮安金氏 家傳 契會圖 三例를 통해본 16세기 계회산수의 변모」 『美術史學』 一四 (兪弘濬 · 李泰浩 『만남과 헤어짐의 미학—조선시대 계회도와 전별시』 學古齋, 二〇〇〇年 再錄)
- 二〇〇八 「實景에서 그리기와 記憶으로 그리기: 朝鮮 後期 眞景山水畫의 視方式과 畫角을 중심으로」 『美術史學研究』 二五七
- 二〇〇八 『옛 화가들은 우리 얼굴을 어떻게 그렸나』 생각의나무
- 二〇一六 『사람을 사랑한 시대의 예술, 조선 후기 초상화 옛 초상화에서 찾은 한국인의 모습과 아름다움』 마로니에북스
- 장인영
- 二〇一四 「조선 후기 사대부들의 회화 인식」 『奎章閣』 四四
- 二〇一五 「조선 말기 조희룡을 통해 살펴본 근대적 회화인식」 『韓國文化』 七一
- 張辰城
- 二〇〇二 「이인상의 서얼의식: 국립중앙박물관 소장 〈劔僊圖〉를 중심으로」 『미술사와 시각문화』 一
- 二〇〇四 「조선 후기 古董書畫 수집열기의 성격 · 김홍도의 〈포의풍류도〉와 〈사인초상〉에 대한 검토」 『미술사와 시각문화』

- 三(石附啓子訳)「朝鮮後期古薰書画收集熱の性格—金弘道の《布衣風流図》と《士人肖像》に対する検討—」『美術研究』三九四、二〇〇八年)
- 二〇〇七 「조선 후기 士人風俗畫와 餘暇文化」 『美術史論壇』二四
- 二〇〇九 「조선 후기 미술과 『林園經濟志』」 조선 후기 古董書畫 수집 및 감상 현상과 관련하여 『震檀學報』一〇八
- 二〇〇九 「강희안 필 고사관수도의 작자 및 연대 문제」 『미술사와 시각문화』八
- 二〇一一 「조선시대 도화서 화원의 경제적 여건과 사적 활동」 『朝鮮書員大展』三星美術館 L E E U M
- 二〇一二 「양식과 페르소나(Persona) : 이인상의 자아의식과 작품세계」 『서양미술사학회 논문집』三六
- 二〇一三 「말이 끝나는 곳에서 그림은 시작된다」 이인상의 庶孽畫 『한국학그림을 그리다』 우리 시대 인문학자 32인의 그림 읽기 문화 그리기』 대학사
- 鄭炳模
- 二〇〇〇 『한국의 풍속화』 한길아트
- 鄭良婉
- 一九七八·一九七九 「李德懋 詩의 繪畫性에 대한 一小考」 『韓國漢文學研究』三·四
- 趙규희
- 二〇〇一 「17·18 세기의 서울을 배경으로 한 文會圖」 『서울학연구』一六
- 二〇一五 「안평대군의祥瑞 산수」 안견 필 《몽유도원도》의 의미와 기능」 『미술사와 시각문화』一六
- 曹玟煥
- 二〇〇九 「조선 후기 유가회화사상」 韓國國學振興院國學研究室編著 『韓國儒學思想大系 XI』 藝術思想編』 韓國國學振興院
- 二〇一〇 「朝鮮朝 儒學者들의 朝鮮朝 後期繪畫認識에 관한 연구」 『東洋哲學研究』六一
- 趙善美
- 一九七九 「朝鮮王朝의 선비그림」 『澗松文華』一六

- 一九八三 『韓國肖像畫研究』 悅話堂
- 一九八四 「東洋畫에 있어서의 倣의 概念에 대하여」 『人文科學』 一三
- 一九九五 『화가와 自화상』 藝耕
- 一九九七 「조선시대 신선도의 유형 및 도상적 특징」 韓國美學藝術學會編 『藝術과 自然』 미술문화
- 二〇〇二 「朝鮮 後期 中國 肖像畫의 流入과 韓國的 變用」 赴京使臣 持來本을 중심으로 『美術史論壇』 一四
- 二〇〇七 『초상화 연구』 초상화와 초상화론』 文藝出版社
- 二〇〇九 『한국의 초상화』 形과 影의 예술』 돌베개
- 趙仁秀
 - 二〇一一 「조선 왕실에서 활약한 화원들」 .. 어진 제작을 중심으로 『朝鮮畫員大展』 三星美術館 L E E U M
- 趙仁熙
 - 二〇一〇 「宋詩를 畫題로 한 조선후기 회화」 『文化史學』 三四
 - 二〇一四 「朝鮮 後期の 呂洞賓에 대한 繪畫 표현」 『美術史學研究』 二八二
- 趙漢雄
 - 一九六八 「鮮初 圖書署 小考」 朝鮮繪畫史 研究를 위한 一基礎』 『亞韓』 創刊号
- 池斗煥
 - 二〇〇一 「白江 李敬輿의 家系와 生涯」 17세기 前半 政局變動과 관련하여』 『韓國思想과 文化』 一三
- 陳準鉉
 - 一九九五 「肅宗의 書畫趣味」 『서울大學校 博物館 年報』 七
 - 一九九九 「인조·숙종 연간의 對중국 繪畫교섭」 『講座美術史』 一一
 - 『단원 김홍도 연구』 一 志社
- 二〇〇二 「조선시대 회화와 음악」 国立国樂院編 『조선시대 음악풍속도 1』 民俗苑

- 崔淳雨
一九六六 「復軒 白華詩畫合璧帖考」 『考古美術』 七六
一九九二 「凌壺觀 李麟祥」 『崔淳雨全集 3: 繪畫』 學古齋
- 崔完秀
二〇〇〇 「단원 김홍도」 『澗松文華』 五九
- 崔有鎭
二〇〇八 「震溟權攄의 회화관과 문학론 비교 고찰」 『漢文古典研究』 一六
- 崔은정
二〇〇九 「呂洞賓圖 칼 차고 시를 읊는 신선」 安輝濬·閔吉泓編 『역사와 사상이 담긴 조선시대 인물화』 學古齋
- 崔池熙·洪那英
二〇〇三 「「耆英會圖」에 나타난 16세기 복식에 관한 연구—남자복식을 중심으로—」 『服飾』 第五三卷三號
- 韓國美術史学会
二〇一三 『표암 강세황: 조선 후기 문인화가의 표상』 景仁文化社
- 車美愛
二〇一四 『공재 윤두서 일가의 회화 .. 새로운 시대정신을 화폭에 담다』 社會評論
- 친주현 / 유혜선 / 박하수 / 이수미
二〇〇六 「윤두서 자화상의 표현기법 및 안료분석」 『美術資料』 七四
- 韓正熙
一九九二 「董其昌과 朝鮮後期 畫壇」 『美術史學研究』 一九三
一九九五 「朝鮮後期 繪畫에 미친 中國의 영향」 『美術史學研究』 二〇六
一九九六 「董其昌의 회화 이론」 『美術史學研究』 二二四

- 一九九九 『한국과 중국의 회화: 관계성과 비교론』 學古齋
- 二〇一二 『동아시아 회화 교류사: 한·중·일 고분벽화에서 실경산수화까지』 社會評論
- 許英桓
- 一九八五 「朝鮮前期契會圖考」 『空間』 二二三
- 洪善杓
- 一九八五 「仁齋 姜希顔의 高士觀水圖」 研究」 『정신문화연구』 二七
- 一九九一 「朝鮮前期 繪畫의 思想的 基盤」 哲学宗教研究室編輯 『韓國思想史大系』 四 (近世前期篇) 韓國精神文化研究院
- 一九九七 「조선후기의 회화 애호풍조와 鑑評活動」 『美術史論壇』 五
- 一九九九 『朝鮮時代繪畫史論』 文藝出版社
- 二〇〇〇 「조선후기 회화의 傳神論」 『韓國學論集』 二二七
- 二〇〇一 「鄭惟吉 題詩 〈宣傳僚友重會關西圖〉」 『美術史論壇』 一二
- 二〇一〇 「〈夢遊桃源圖〉의 창작세계: 선경의 재현과 고전 산수화의 확립」 『美術史論壇』 三一
- 二〇一一 「화원의 형성과 직무 및 역할」 『朝鮮畫員大展』 三星美術館 L E E U M
- 二〇一二 「김홍도 생애의 재구성」 『美術史論壇』 三四 (『조선 회화』 韓國美術研究所, 二〇一四年に再録)
- 二〇一三 「조선 전기의 契會圖 유형과 해외소재 작품들」 『美術史論壇』 三六
- 「美術文化로 보는 韓日: 조선 초기 한일 회화교류 연구의 학문사적 학설사적 과제」 『일본학』 三七
- 黃晶淵
- 二〇〇二 「石農 金光國 1727(1797)의 생애와 書畫收藏 활동」 『美術史學研究』 二三五
- 二〇〇九 「15세기 서화 수집의 중심, 안평대군」 『내일을 여는 역사』 三七
- 二〇一二 『조선시대 서화수장 연구』 新丘文化社

〈日本語文献〉(五十音順)

- 相澤正彦
二〇〇九 「二つの水亭書斎図」『アジア遊学』一二〇
安輝濬
一九八七 藤本幸夫・吉田宏志訳『韓国絵画史』吉川弘文館（『韓国繪畫史』一志社、一九八〇年）
五十嵐公一
二〇〇三 「朝鮮美術展創設と書画」『美術史論叢』一九
石附啓子
一九九九 「李麟祥 劍僊図」解説『世界美術大全集・東洋編 第一一巻 朝鮮王朝』小学館
二〇〇四 「宣傳僚友重會關西圖」『國華』一三〇九
板倉聖哲
一九九四 「『樹下遊宴図屏風』（ダラス美術館蔵）の祖型をめぐる諸問題―東洋絵画における遊宴の図像に関する序説」『美術史論叢』一〇
一九九八 「中国風俗画における遊宴の図像についての研究―馬遠『西園雅集図卷』（ネルソン・アトキンス美術館）をめぐる」『鹿島美術研究』一五号
一九九九 「馬遠『西園雅集図卷』（ネルソン・アトキンス美術館）の史的位罫―虚構としての『西園雅集』とその絵画化をめぐる」『美術史論叢』一六
二〇〇一 「北宋時代末知識人の表象―李公麟の肖像画を中心に」伊原弘・小島毅編『知識人の諸相：中国宋代を基点として』勉誠出版
二〇〇一 「芸術家の自画像―中国文人は自らをどのように表現してきたか」東京大学東洋文化研究所編『アジアを知られば世界がわかる』小学館

- 二〇〇六 「十七世紀日本絵画における中国像狩野山雪『藤原惺窩閑居図』(根津美術館)を例に」『鹿島美術研究』年報二三号別冊
- 二〇〇七 「張雨題『倪瓚像』(台北故宫博物院)をめぐる諸問題」『美術史論叢』一七
- 二〇〇八 「睢陽五老図像の成立と展開―北宋時代知識人の絵画表象」『美術史論叢』二四
- 二〇〇九 「絵画史における明宗朝―契会図と王室発願仏画を中心に」『アジア遊学』(勉誠出版)一二〇
- 二〇一三 「東アジアにおける蘭亭曲水宴図像の展開」『美術史論叢』二九
- 二〇一四 「沈周早期の作画における倣古意識―『九段錦画冊』(京都国立博物館)を中心に」『美術史論叢』三〇
- 井手誠之輔
- 一九九八 「畢世長図(睢陽五老図卷断簡)」小川裕充・弓場紀知責任編集『世界美術大全集・東洋編 第五卷 五代・北宋・遼・西夏』小学館
- 伊藤亜人
- 二〇〇二 「韓国における任意参加の組織―地方出身者の結社を中心として」韓敬九／伊藤亜人編『韓日社会組織の比較』慶應義塾大学出版会
- 伊藤久美
- 二〇一三 「『明恵上人樹上坐禅像』に関する一考察:型と主題の再検討を中心に」『美術史』一七五
- 伊藤大輔
- 二〇〇二 「似絵と尚歯会図」『岡山大学芸術学』八(『肖像画の時代―中世形成期における絵画の思想的深層』名古屋大学出版会、二〇一一年に改稿再録)
- 二〇一〇 『肖像画の時代―中世形成期における絵画の思想的深層』名古屋大学出版会
- 李美林
- 一九九九 「金弘道 士人肖像」解説『世界美術大全集・東洋編 第一一巻 朝鮮王朝』小学館

- 植松瑞希
 二〇一五 「都市が育む絵画の歴史、蘇州の場合」大和文華館編『蘇州の見る夢・明・清時代の都市と絵画』特別展』大和文華館
- 植村幸生
 二〇一四 「東京藝術大学図書館蔵「中樞府重修宴契會圖」にみる十六世紀朝鮮の宴礼楽舞」『東京藝術大学音楽学部紀要』三九
- 宇佐美文理
 二〇一〇 『『歴代名画記』—〈気〉の芸術論—書物誕生—あたらしい古典入門—』岩波書店
- 海老根聰郎
 一九八四 「呂洞賓といわれる画像について—像主の変身—」『美術研究』三二二八号
- 一九八六 「文会図と禅会図、斎居図」国際交流美術史研究会シンポジウム第四回報告書『東洋美術における風俗表現』国際交流美術史研究会
- 一九九八 「道釈画をめぐる中国と日本」小川裕充監修／日本放送出版協会編『故宮博物院3元の絵画』日本放送出版協会
- 一九九九 「道釈人物画」海老根聰郎／西岡康宏責任編集『世界美術大全集・東洋編 第七卷 元』小学館
- 大西廣
 一九八七 「維摩居士図 文清筆」解説『禅林画賛—中世水墨画を読む』毎日新聞社
- 一九九〇 「肖像画における『擬』の問題」『国際交流美術史研究会第六回シンポジウム』肖像』国際交流美術史研究会
- 一九九四 「一休をめぐる何が起こったか」肖像画における『破格』の問題」東京国立文化財研究所編『人の〈かたち〉人の〈からだ〉—東アジア美術の視座—』平凡社
- 大田昌子
 二〇〇五 「花鳥の居場所—西本願寺書院のイメージ・システムを中心に」長岡龍作編『講座日本美術史4造形の場』東京大

- 学出版会
- 大木康
一九九六 『不平の中国文学史』筑摩書房
- 小川裕充
一九九八 「書画と美術―「今、日本の美術史学をふりかえる」国際研究集会に寄せて」『美術史論叢』一四
二〇〇八 「安堅 夢遊桃源図巻」『臥遊・中国山水画とその世界』中央公論美術出版
二〇一一 「東アジア美術史の可能性」『美術史論叢』二二七
- 呉永三
二〇一六 「安堅筆『夢遊桃源図』に見られる洞のポトス」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』六六三
- 門脇むつみ
一九九八 「物数寄の肖像画 佐久間将監像―江戸時代初期の文化人交流のなかで」『美術史』一四五（二〇〇三）『寛永文化の肖像画』勉誠出版に改稿再録）
- 金文京
二〇一二 『萍遇録』と「兼葭堂雅集図」―十八世紀末日朝交流の一側面」『東方学』一二四
- 金炫栄
二〇一五 （田中俊光訳）「一八〇―一九世紀のソウル知識人の自己と社会認識―朴齐家と沈魯崇の場合」渡辺浩一／ヴァネッサ・ハーディング編『自己語りと記憶の比較都市史』勉誠出版
- 河野道房
二〇一三 「書画一致論」尾崎雄二郎／笠沙雅章／戸川芳郎編集代表『中国文化史大事典』大修館書店
- 河野元昭
一九九二 「高橋由一 江戸絵画史の視点から」辻惟雄編著『幕末・明治の画家たち―文明開化のはざまに』ぺりかん社（二〇

- 八年新装版に再録)
国華編輯委員会
二〇〇〇 『中國肖像畫』特輯に當つて『國華』一二五五
古原宏伸
一九九四 「古典主義の終焉―仿ということ」『橋本コレクション十八世紀の中國繪画―乾隆帝時代を中心に』渋谷区立松濤美術館
二〇〇〇 「朝鮮山水画における中国繪画の受容」『青丘學術論集』一六（『中國画卷の研究』中央公論美術出版、二〇〇五年に再録）
小林信明
一九六七 『新積漢文大系22』列子』明治書院
齋藤希史
二〇一一 「漢文ノート20）隱者の琴」『UP』一〇月号、東京大学出版会
佐藤康宏
二〇〇三 「日本繪画と自画像―江戸時代まで」三浦篤編『自画像の美術史』東京大学出版会
二〇一五 「中国の文人画と日本の南画」板倉聖哲責任編集『日本美術全集6（テーマ巻①）：東アジアのなかの日本美術』小学館
島尾新
一九九四 「柿本人麿像における『かたち』と『意味』」東京国立文化財研究所編『人の（かたち）人の（からだ）：東アジア美術の視座』平凡社
清水茂
一九六六 『（新訂中国古典選第20卷）唐宋八家文』下、朝日新聞社

- 杉山享司
二〇〇四 「宣傳官庁契会図」『國華』一三〇九
- 鈴木廣之
一九九六 「類似の発見―室町の〈擬〉、江戸の〈見立て〉」『日本の美学』二四
- 関野貞
一九三二 『朝鮮美術史』朝鮮史学会
- 曾布川寛
一九九四 「董其昌の文人画」荒井健編『中華文人の生活』平凡社
- 宣承慧
二〇一一 「朝鮮王朝の桃源図―安堅筆〈夢遊桃源図〉について」『桃源万歳！―東アジア理想郷の系譜』岡崎市美術博物館
- 瀧本弘之
二〇〇五 『中国歴史人物大図典 神話・伝説編』遊子館
- 戸田禎佑
一九九四 「人物画における聖と俗」東京国立文化財研究所編『人の〈かたち〉人の〈からだ〉―東アジア美術の視座』平凡社
- 張辰城
二〇〇八 石附啓子訳「朝鮮後期古薫書画収集熱の性格―金弘道の《布衣風流図》と《士人肖像》に対する検討―」『美術研究』
三九四（二〇〇四）「조선 후기古董書畫 수집열기의 성격…김홍도의〈포의풍류도〉와〈사인초상〉에 대한 검토」『미술사와
각문화』(三)
- 趙善美
一九八四 「中国の肖像画論―伝神論について」『講座美学1:美学の歴史』東京大学出版会
二〇〇二 「朝鮮王朝時代肖像画の類型及び社会的機能」『美術研究』三七四

鄭良謨

一九七七 大西修也訳「李朝前期の画論」松下隆章／崔淳雨編『水墨美術大系 別巻2：李朝の水墨画』講談社
中村茂夫

一九六五 『中国画論の展開：晋唐宋元篇』中山文華堂

長広敏雄訳注

一九七七 『歴代名画記』一・二、平凡社

ニクラス・ルーマン

二〇〇四 馬場靖雄訳『社会の芸術』法政大学出版社

ノーマン・ブライソン

一九九九 佐藤康宏訳「言説、形象―『言葉とイメージ』第一章」『美術史論叢』一六

林進

一九七八 「雪村の呂洞賓図について―その主題とモチーフを中心に―」『大和文華』六三号

二〇〇〇 「雪村『自画像』―その構造とメッセージ―」『日本近世絵画の図像学―趣向と深意―』八木書店（初出は『雪村自画像』の構造）茨城県立歴史館特別展図録『雪村一常陸からの出発』一九九二年）

星川清孝著／柚木利博編

二〇〇七 『(新書漢文大系8) 古文真宝(新版)』明治書院

洪善杓

二〇一六 安在媛訳「朝鮮後期における宮廷絵画の中興及び革新と宮廷画家の誕生」『美術史論叢』三二

馬淵美帆

二〇〇一 「絵巻の風俗表現と風俗画―言説と形象の視点から―」『美術史論叢』一七

二〇〇六 「『見立て絵』の記号論的研究」『鹿島美術研究』年報二三号別冊

- 三浦篤
- 二〇〇六 『近代芸術家の表象―マネ、ファンタンイラストールと1860年代のフランス絵画』東京大学出版会
- 宮崎法子
- 二〇〇三 『花鳥・山水画を読み解く―中国絵画の意味』角川書店
- 関周植
- 二〇〇九 「韓国における文人画の伝統」中谷伸生編著『東アジアの文人世界と野呂介石―中国・台湾・韓国・日本・ポーランドからの考察―』関西大学出版部
- 村上哲見
- 一九九四 「武臣と遺民―宋末元初江南文人の亡国体験」『中国文人論』汲古書院
- ルイ・マラン
- 二〇〇二 渡辺香根夫訳『王の肖像 権力と表象の歴史的哲学的考察』法政大学出版局
- 盧載玉
- 一九九九 『契会図』についての一考察』『美学芸術学』一五
- ユキオ・リピット
- 二〇〇六 「満たされぬ肖像―バーネット&バート・コレクションの「春屋妙葩蔵」について」『美術史家、大いに笑う―狩野元昭先生のための日本美術史論集』ブリュッケ
- 柳喜卿／朴京子
- 一九八三 『韓国服飾文化史』源流社
- 横尾拓真
- 二〇一五 「池大雅筆「楡枋園図巻」(大徳寺蔵)について―中国園林文化の受容と展開―」『美術史』一七八
- 吉田宏志

- 一九九二 「朝鮮の茶」赤井達郎ほか編集『茶の湯絵画資料集成』平凡社
- 一九九九 「朝鮮王朝美術の特質―儒教文化と呪の造形美」『世界美術大全集・東洋編 第一一巻 朝鮮王朝』小学館
- 一九九九 「李麟祥 松下独坐図」解説『世界美術大全集・東洋編 第一一巻 朝鮮王朝』小学館
- 二〇〇〇 「朝鮮王朝の文人画家 李麟祥の絵画」『大和文華』一〇三
- 吉田光男
- 一九九八 「朝鮮の身分と社会集団」『岩波講座世界歴史一三:東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店

〈中国語文献〉(拼音順)

- 雷子人
- 二〇一〇 『人迹于山:明代山水画境中的人物、结构与旨趣』北京大学出版社
- 黄輝
- 一九八七 『中国古代人物服式与画法』上海人民美術出版社
- 莊申
- 一九六八 「明沈周莫斫銅雀硯歌圖考」『明報月刊』二五(同編著『中國畫史研究續集』正中書局、一九七四年に再録)

〈英語文献〉(アルファベット順)

- Niklas Luhmann, *Art as a Social System*, Stanford University Press, 2000.
- Norman Bryson, *Word and Image: French Painting of the Ancien Régime*, Cambridge University Press, 1981.
- Marilyn Fu & Shen Fu, *Studies in Connoisseurship: Chinese Painting from the Arthur M. Sackler Collection in New York and Princeton*, Princeton University Press, 1973.
- James Cahill, *The compelling image: nature and style in seventeenth-century Chinese painting*, Harvard University

Press, 1982.

James Cahill, *The distant mountains : Chinese painting of the late Ming Dynasty, 1570-1644*, Weatherhill, 1982.

Richard Vinograd, *Boundaries of the Self : Chinese Portraits 1600-1900*, Cambridge University Press, 1992.

〈図録〉(刊行年順)

一九七六

『文人画粹編』一〇、中央公論社

一九八一 国立中央博物館編『東垣先生蒐集文化財』国立中央博物館

一九八四 国立中央博物館編『東垣先生蒐集文化財：繪畫』国立中央博物館

一九八五 安輝濬責任監修『〈韓國の美19〉風俗畫』中央日報社

孟仁在責任監修『〈韓國の美20〉人物畫』中央日報社

鄭良謨責任監修『〈韓國の美21〉檀園金弘道』中央日報社

一九九〇 国立中央博物館編『檀園金弘道』国立中央博物館

一九九三 서울대학교博物館編『韓國傳統繪畫』서울대학교博物館

一九九五 国立中央博物館編『檀園 金弘道』国立中央博物館

一九九六 安輝濬責任監修『〈韓國の美11〉山水畫：上』中央日報社

高麗大学校博物館編『朝鮮時代 선비의 墨香』高麗大学校博物館韓國学研究所

幽玄齋選『韓國古書畫圖録』幽玄齋

一九九七 韓國考古美術研究所編『東垣李洪根蒐集名品選：繪畫編』韓國考古美術研究所

一九九八 中野徹／西上実責任編集『世界美術大全集・東洋編 第九卷 清』小学館

小川裕充／弓場紀知責任編集『世界美術大全集・東洋編 第五卷 五代・北宋・遼・西夏』小学館

- 一九九九 三星文化財団編『〈새천년 특별기획〉 인물로 보는 한국미술』三星文化財団
- 奈良国立博物館編『聖と隱者―山水に心を澄ます人々』奈良国立博物館
- 西岡康宏／宮崎法子責任編集『世界美術大全集・東洋編 第八卷 明』小学館
- 海老根聰郎／西岡康宏責任編集『世界美術大全集・東洋編 第七卷 元』小学館
- 菊竹淳一／吉田宏志責任編集『世界美術大全集・東洋編 第一卷 朝鮮王朝』小学館
- 二〇〇〇 嶋田英誠／中澤富士雄責任編集『世界美術大全集・東洋編 第六卷 南宋・金』小学館
- 安輝濬責任監修『〈韓國의 美12〉 山水畫・下』中央日報社
- 二〇〇一 俞弘濬／李泰浩編『만남과 헤어짐의 미학―조선시대 계회도와 전별시』學古齋
- 国立国樂院企画／徐仁華・尹軫映編『朝鮮時代 宴會圖』民俗院
- 東亞大学校博物館編『東亞大學校 所藏品圖錄』東亞大學校博物館
- 二〇〇二 国立中央博物館編『朝鮮時代風俗畫』国立中央博物館
- 国立国樂院編『조선시대 음악풍속도 1』民俗苑
- 渋谷区立松濤美術館ほか編『〈日中国交正常化三十周年記念〉 上海博物館展―中国文人の世界』読売新聞社
- 二〇〇三 藝術의 殿堂『豹菴 姜世晃』藝術의 殿堂・서울書藝博物館
- 俞弘濬／李泰浩編『遊戯三昧―선비의 예술과 선비취미』學古齋
- 二〇〇四 서울市立博物館／靑州文物学会／中央日報編『위대한 얼굴…한·중·일 초상화 대전』서울市立博物館／靑州文物学会
- ／中央日報編
- 国立济州博物館編『〈19세기말 제주의 계엄사령관〉 察理使 李奎遠』国立济州博物館
- 二〇〇六 国立春川博物館編著『소나무와 한국인…특별전』通川文化社
- 韓國民族美術研究所編『澗松文華 七〇〈澗松誕辰百周年紀念〉』韓國民族美術研究所
- 林柏亭主編『大觀・北宋書画特展』国立台北故宮博物院

- 二〇〇七 国立中央博物館美術部編著 『〈國立中央博物館 韓國書畫遺物圖錄 15〉 조선시대 초상화 一』 그라픽네트
- 二〇〇八 国立中央博物館編 『가을 秋.. 유물 속 가을 이야기』 通川文化社
- 『朝鮮王朝の絵画と日本..宗達、大雅、若冲も学んだ隣国の美』 読売新聞大阪本社
- 国立中央博物館美術部編著 『〈國立中央博物館 韓國書畫遺物圖錄 16〉 조선시대 초상화 二』 그라픽네트
- 二〇〇九 国立中央博物館美術部編著 『〈國立中央博物館 韓國書畫遺物圖錄 17〉 조선시대 초상화 三』 그라픽네트
- 文化財庁編 『승례문 기억, 아쉬움 그리고 내일.. 승례문 화재 1주년 특별전시회』 文化財庁
- 二〇一〇 『〈탄신 300주년기념〉 凌壺觀 李麟祥.. 소나무에 뜻을 담다』 国立中央博物館
- 二〇一一 『朝鮮畫員大展』 三星美術館 L E E U M
- 国立中央博物館編 『초상화의 비밀』 国立中央博物館
- 二〇一二 国立中央博物館編 『국립중앙박물관 소장 동원컬렉션 2』 韓國考古美術研究所
- 二〇一三 国立中央博物館編 『豹菴 姜世晃.. 탄신 300주년 기념 특별전, 시대를 앞서 간 예술혼』 国立中央博物館
- 東京国立博物館編 『特別展·上海博物館中国絵画の至宝』 東京国立博物館
- 東京国立博物館ほか編 『台北國立故宮博物院神品至宝..特別展』 NHK
- 二〇一四 国立光州博物館編 『공재 윤두서.. 공재 윤두서 서거 300주년 기념 특별전』 비에이디자인
- 二〇一五 大和文華館編 『蘇州の見る夢·明·清時代の都市と絵画·特別展』 大和文華館

論文の内容の要旨

論文題目 朝鮮時代人物画の展開—契会図、雅集図と画家の自己表象—
氏名 中尾 道子

朝鮮時代（1392～1910）は、朝鮮半島の美術史上、絵画がもっとも盛んに制作された時期であり、本研究で取り上げる人物画の分野にも多様な展開が認められる。本論文では、朝鮮時代の絵画における人の表現をめぐるさまざまな試みに着目し、特に実在する人物たちを複数の人物の集合的構成として表現したもの（契会図、雅集図・雅会図）、さらにはそこから派生したと考えられる画家の自己表象（自画像的表現）の問題に焦点を当てる。

本研究では朝鮮時代の絵画を対象に人物画の展開を追うわけであるが、その全てを扱うわけではない。肖像画に焦点を当てるが、本研究で扱うのは、すでに多くの研究がなされている国王や功臣の肖像ではなく、実在の人物が描かれるという意味において、契会図や雅集図・雅会図を広く集団の肖像画と捉える。さらに、画家の自己表象の問題を扱うが、分析の対象にした作品には必ずしも自画像であることがはっきりと明かされたものではない図像も含まれる。これらを契会図や雅集図・雅会図といった集合像の場合と、単独像の場合とに分けて、以下のような構成で論じた。

第一部「朝鮮時代人物画研究序説」では、序章「記録と記憶のメディアとしての絵画」において、人物画の展開をたどる前に、朝鮮社会が享受していた造形芸術の価値観と芸術作品との関わりについて概観し、第一章「契会図の変遷—山水から人物へ」では、人物表現の展開において第一の転機が認められる契会図の変遷をたどる。朝鮮時代の契会図は、16世紀中葉を境に山水を主体とする図像から宴の場면을重視する方向に変化していくが、特に近年紹介された「中樞府重修宴契会図」（東京藝術大学附属図書館蔵）をはじめ、1580年代に制作された作例を詳察した結果、画中に参会者の数や座次までもが忠実に再現される一方、参会者が附した詩文等からは、実在の宴を絵画化するに当たり、中国の故事に倣おうとするなど、理想化の側面もうかがえる。契会図では事実としての会合を記録するだけでなく、士大夫による宴のあるべき姿を後世に伝えることが意図され、個々の人物の肖似性よりも為政者としての理想像の描出に注力されたことなどが指摘できる。また、本章において、16世紀半ばを境に契会図が山水を主体とする図像から人物に焦点を当てた図像に推移する理由を、朝鮮画壇が摂取した中国絵画の画風の差異にのみ求める従来の研究を再検討し、高麗時代に行われた海東耆老会に関する文献史料の分析等から、新たに内的要因の可能性を提示した。

第二部「集いのかたちの変容—ジャンルの横断と雅俗の交錯」では、人物画の展開において第二の転機となる18世紀の雅集図・雅会図を取り上げる。17世紀後半以降、士大夫官僚たちによる政治的な紐帯にもとづく契会のみならず、民間において、社会的、文化的な結びつきによる私的な集まりの流行が見られるようになる。これらは、雅集、勝集、詩会、詩社など、名称こそ実にさまざまであるが、ある共通の目的、絆で結ばれた人々の集まりであり、その共通の絆は契会のように政治的な意味合いの強いものから、地縁、血縁、文学、思想的なものへと広がりを見せ、会合を記念し、記録するために数多くの絵画が制作された。こうした絵画は多様なバリエーションで展開するが、18世紀に至って、それまで描かれる側であった士大夫文人、あるいは専ら作画の担い手であった画家が、作者自身を含む雅集の場を描いたものが出現するようになる。

第二章「一八世紀朝鮮の知識人たちの表象—姜世晃周辺の画家たち」では、姜世晃（1713～91）をはじめとする18世紀の文人画家たちの作例を中心に考察する。作品それぞれに密着した分析となるが、特に、集まりの中に自己を描くという行為、その際行なわれる様々な演出に着目し、従来の人物画のジャンル分けを横断する現象を分析する。その結果、付随する文字情報によって実在の会合を描いたものとわかる絵画は、現実を再現しようとする意図の他に、さまざまな演出（故事・古典を借りた理想化や何らかの型に当てはめる類型化）がなされていたことが認められる。こうした事例は、実在の人物が描かれる朝鮮時代の肖像画制作に求められた肖似性の追究とは異なる方向性を示すものであり、作品の成立には、注文人・制作者・鑑賞者の間における古典の知識や儒教的教養にもとづく当時の人々の共通の認識が機能していたと考えられる。

第三章「金弘道「檀園図」考」では、18世紀朝鮮において図画署の画員として活躍した金弘道（1745～1806以降）の代表作の一つである「檀園図」（韓国・個人蔵）を取り上げる。本図が実在した集まりを描いた絵画の中に作者自らが像主として登場する自画像的な表現を含んでいるという点に着目し、表現上の特徴及び作画意識の変化の両面から考察を試みた。その結果、本図は金弘道が後半期に多用する雅号「檀園」の初出が認められるなど、まさにその画風の移行期に描かれた作品として位置付けられ、「西園雅集図」等の中国の古典を題材にした故事人物画の受容と実在の集いの絵画化という性格を合わせ持つ作品、すなわち、金弘道独自の解釈による古の文人の文雅な場の再現と、18世紀朝鮮の文人社会の表象が結合した、画中に新たに生み出された雅集のイメージであることを提示した。

第三部「自画像への射程——一八世紀の朝鮮社会と画家の自己表象」では、第二部に見た他者との関係の中で芽生えた自意識が、「集まりの中に自己を描く」という段階から、「自分自身を描く」という行為へ向かう、その様相を、単独像を対象に考察し、画家と画家を取り囲む人たち、特にあからさまな自己表象が許されなかった社会階層にあった人々が、集団

(属する階層)としての意識をいかにして一個の図像に収斂していったのかということ論証した。

第四章「金弘道の自画像的表現とその特質」では、「布衣風流図」(三星美術館Leeum蔵)、「月下吹笙図」(澗松美術館蔵)、「秋声賦図」(三星美術館Leeum蔵)等の金弘道の自画像的表現を含んだ作例を検討する。これらを同時代の文人画家たちによる自画像と比較したとき、あからさまに自分であるという表明が許されなかった当時の画員画家が置かれた状況が浮かび上がる。金弘道は、何かの行為をする像主に自らを投影し、また古の文士に自己のイメージを重ねるという屈折した二重構造をもって自己を表明しているのであり、そこには限られた鑑賞者の間でのみ交わされる自己のイメージが意図されている。

第五章「李麟祥筆「劍僊図」(国立中央博物館蔵)をめぐって」では、庶孽(士族の庶子)の画家、李麟祥(1719~60)の「劍僊図(松下人物図)」を考察し、像主の図様の型を呂洞賓像に求める説の是非を論じる。モチーフの解釈を改めて行い、新たに提示できる画像と史料から主題の再考を試みた。その結果、「劍僊図」は実在人物である酔雪翁(柳逅)を「劍僊」、すなわち呂洞賓になぞらえて描いたものとの結論が導かれるが、ただしその際、実在人物の姿を古人像に重ね合わせる、すなわち写実と理想化の均衡を図るために、従来の呂洞賓図像の改変が行われた可能性が指摘できる。「劍僊図」は李麟祥が欽慕した庶孽知識人である柳逅の肖像画であると同時に、李麟祥自身を含む庶孽たちが置かれた不遇な社会的立場への悲哀と共苦が一図像に収斂された作品である可能性を指摘した。

補論では、画家の身分と表現をめぐる問題を、18世紀朝鮮に新たに登場する「儒画」「儒法」「士気画」といった同時代史料に見える語に焦点を当てて考察を行った。朝鮮後期に明の董其昌(1555~1636)の南北二宗論の影響により確固となった身分による画派の区分は、上層文化としての文人画の概念に身分差別的な意味をさらに付与することとなり、李奎象(1727~99)の「儒画」「儒法」や、沈鏗(1722~84)の「士気画」といった語が生み出される背景となった。現実の対象に似せて描くことよりも、描く人の精神性の表出を重視する、文人が自作の画を擁護するために考え出したとも捉えられるこうした理論は、結果的に絵画に対する関心を高め、朝鮮後期から末期にかけて士大夫文人たちによる絵画の創作を促し、書画評論が活発に行われるきっかけともなった。

以上を踏まえ、結論では各章で得られた結果をまとめるとともに、本論文で扱うことのできなかつた問題について、今後の課題と展望を示した。

本論文の後半で考察した、一人の人物の姿に、別の人物の姿を重ねて表現する、いわゆる見立てやダブル・イメージの表現には、肖像画、風俗画、道釈人物画、故事人物画といった朝鮮絵画史研究における従来の人物画の各ジャンルの枠組みを超えたさまざまな内容が認められる。本研究は、朝鮮絵画の造形的特質を人物画の展開から論じるものであるが、以上

見てきたような事例は必ずしも朝鮮絵画のみに見られるものではない。像主の特異な人間性を際立たせるために、実在する人物を古人や仙人に重ねるなどして、像主に合わせた改変を行うという表現手法は中国や日本でも古くから見られるものである。

近代的な国民国家の観点から語られてきた朝鮮時代の絵画史は、中国絵画との相違や自国の書画のアイデンティティを究明することに重点が置かれ、絵画表現における普遍性の追求は曖昧なままにされてきた。

沈鏗『松泉筆譚』が述べるように、18世紀朝鮮の知識人たちは、自国の書画が中国の模倣に過ぎず、それを超えるものは稀であると自認していた。本研究で詳論した画家たちは、そうした状況にあって、中国画を咀嚼し、再解釈し、改変・翻案して自らの作画に取り入れた画家たちであった。いつの時代の、どの地域の中国絵画に範を取るかは、それを受容する側に委ねられているのである。